

(H. Poincaré の問題について)

Problème p (素材其の二)

岡 潔

つぐみや鶉や鶯や

さやかに遊ぶ彌生月

萌えよ萌えよ春の草 生ひよ生ひよ野辺のくさ

新し夢を育みて

おととひ (1949. 1. 25) に記録 (素材其の一) の訂正をお送りしまして、一晩ねて明る朝 (26日) 目を覚ますと、先ず此のしらべが口をついて出ました。それからすぐ起きて小便をしたのですが、其の色が非常に濃い黄の勝った橙色でした。以前はよくこう云ふ現象があったのですが (ずっと小さい頃から、と申しますよりはその頃の方むしろよけいに)、この十数年来かつてなかった (または記憶に残って居ない) 現象で、しかもこんなに色の強いのは、ことによると始めてかも知れませんか、全く驚いてしまひました。

上の詩は、作者は忘れましたが、「日本少年」か「少年世界」か「少年」かで、打出時代の前後によんだものであります。尚「お伽花籠」に「金馬銀馬」と云ふのがあったことも、チャット意識をかすめました。

今一度「訂正」をごらん下さい。手がふるえて字の体をなさないでせう。こんなに顯著なのも近頃見なかった現象です。それで私は、「一人の研究者」は、此のやがての好機来逃すべからずと思って、この波形を記録する心の用意《後に云ふ礼》をととのへて、手ぐすね引いて待ち構えて居たのでした。

そこへもって来て第二日に上述の「現象来」《三礼》です。それと云ふので、早速「録音班を總動員」《後に云ふ第十門》して録音にとりかかりました。方針は、午前中は、何でもかでも書きとめて (「心情の客体化」珈琲三杯)、午後これを「検討」しよう云ふのでして、この操作も亦心を使ってするのですから、書いたものだけを一寸見れば、同じく何でも書きとめて行って居るように見えますが、よく見れば實質は前者の「観」に対して後者は「照」であります。この方針を一口に云ひますと、

月は照す半江の水。

お吟みになった方は、どなたか忘れましたが、実によい句ですね。何でも始め一江となっていたのを、壁に題して一旦遠く去ってから、ハツとこの「半江」の言葉を発見して、空間を遠しとせずに引き返したとか聞きましたが、げに「隼に取って空間は問題ではありません」、流石は文字のお国柄ですね。「人字を愛すれば字もまた人を愛する」のですね (報、報身参照)。(他の独創や天才それ自体をさへをあがめること《礼》、アルサーヌ・ルパン参照)。午後はおコーヒ二杯を次女のさおりにサービスして貰ひました。

いにしへの狭織の帯をむすび垂れ

誰しのひとも君には勝たじ (萬葉)。

よいうたですね、この心に少しでもあやかるようにと思って、借りてつけた名なのですが、本当に今の心的季節に偶然ぴったりとあてはまりますね。

そして色々書きつけました。それは暫く保存してはございますが、一口に申しますと、無辺刹境の「いとくち」のもの、つまり一切平等無差別でありますから、皆さまはもう私を信じて下さいますことと思ひますから、お目にかけない方がよいと考へます。その有様を美しく装ふて表現しますと、

### 岩に激する清流雪と散り玉と飛ぶ

(日光の「いとくち」、小学讀本)がそれであります。

ちなみに申しますと、芭蕉は其のメモを整理するに当って、次の二種類に分類して居ます：

(A) この類<sup>たくひ</sup>のこと皆あることなりとぞ、(B) ことわりなり理に盡きたるものなり。

よい分類法ですね。私たち、今後「借りることに」《礼》いたしませう。もう皆さまの中には、「宗教がない」など云ふ人はないでせうから。(人皆潜在意識や仁心をもっておりませう)。

扨て、上述の「一切平等無差別」の録音を、どなたにでも安心してきいて頂けますような調べに整へようとしみますと、次の二操作がいるのです：

A この実質(境それ自身)を(たとへばカントの、此の名は「おどし」のためにあげたものではありません。)時空の框にはめること、云ひ換へますと、この光(と云っても既に大ミオヤさまからぢかに射すお光りそのものではありませんが)、それを第一次的影に変形してそれを見ること。

B さらに此の光(と云っても既に影ですが)、それを礼節(直接人に対するものばかりではありません。それに姿よりは心であります。)、善悪(目標が大事です。固定してはいません。)等にあてて、第二次的影に変形してそれを見ること。

見ることのあとには、いづれも取捨撰択して更にその好を整へること(このすべてに芭蕉の不易、流行の二種類あります(古きを軽んぜず、旧習を墨守せず。))、なる操作の省かれて居ること云ふまでもありません。

この二操作は、昨日はしなかつたのでありまして、私(ここでは編曲者)が何故このようなハーモニー(半江の水)のつけ方をしているかを今(第三日、27日昼食直前、心的に云つて)御説明しているのであります。

昨日は「無差別」に「第二次的」録音をしています中に、いつか No. 15 まで書いて行って今日はここまでにしようかと思ひました。と、間髪を入れず後の正六時が打ちました(糖分を全く抜き去った飲みものは、愛の大ミオヤさまのお眼からごらんになれば、それは濁っているのであります)。私は永い間の充分よく慥めた経験から、私に對しましては、それは一切智の大ミオヤさま「同じようですが全智ではありません。つまり私たちの知と云ふ知の源はすべてそこに發すると云ふのでありまして、凡夫が勝手に御想像申し上げたようなものではありません。後者は人の作った神であります。西洋の諸哲人に聞いてごらん下さい。」「そのお慈悲の大ミオヤさまが、お手ずから、私のようなもののために、お打ち下さったピリオッドであることが、今は、疑ひなくよめるようにまできていますから」、その日は其処で打ち切って、すぐに御近所へお風呂をいただきに参りました。

小便はそれまで出ませんでした、そこで始めて二度目の小便を試みたのですが、もうすっかり「くれて」色は分りませんでした。

桐の木に、鶉鳴くなる、へいの内 (芭蕉)。

お風呂は丁度沸いた所で、私は先づげす板と申しますが、底を入れようとして割合長くかゝったのですが、仲々うまく参りませんでした。それは板が厚いため浮力が強くて、すぐ浮いてしまふからなのです。細かい構造を申しますと風呂桶には下側の前後 (180° ひらいた) ニヶ所に止め木がついていますし、板には一ヶ所、底板を陸とみれば湾のような切り込みが明けてあるのでして、それで底板のこの孔の正反対の所を先きに止め木の所に入れて、次に、孔のために止め木が一時止め木でなくなって居ますから、その方の側も沈めて、そうすると底板は一時的には入るには入りますが、手をはなせば、浮力はまだそのまゝ生きていますから、また浮いてしまひますから、底板を 90° 程廻すことによって、この浮力を半永久的にその働きに於て殺してしまふのです。こうすれば底板が本当には入るような仕組になって居るのです。

所で、私始めは、底板の、向ふ側を先に手前をあとに入れようとしてうまく成功しなかったのですが、その御主人が教へて下さいました。言葉はそのまゝではありませんが：

順序は、身に近い方をさきに、遠くをあとに (声)。

それで、成る程と思ひまして、その通りに改めますと、苦もなく成功しました。

それから、一昨日 (第一日) の巷の声の姿 (姿に表現して見せていただいたり、見て頂いたりするのがハッキリ且つ速く分るようです)、その姿は一寸次のようでした：

喜びのお光にふかれて散る、悦しさの蝶のような。

昨日のは、それ程ではありませんが、まだやゝ其の倂はありました。但し、蝶は別種でありました。(ここで少しおそいおひるにいたします。後の一時二十五分。)《之はすんだあとで今入れているのですが、以上が礼》《この映り方が第七門》

まだお昼が出来ないようですから、其の間に、御一緒に、一寸午後 (心的) の目次を切ってみませう：

## Problème p

### 1 波形 (体, 相, 用)

### 2 科学とは何かを A, B, C から再び教えて頂くこと (師恩)

《俳諧能過ぎたり、暮ならば二、三目あとへもどしてすべし、芭蕉》

(特に、体験 (体) と Descriptive Science (其の前は話し合ふかやむなくば自問自答する、「二元」に始まる (相)) とを飛ばせてしまつては、Exact Science (相の生命) や Application (用) はあり得ないこと。ちなみに今一度小学一年へ入って、一年間 10 か 20 までの生きた数を学ぶこと、止 (抽象化) に徹しなければ生きては来ません。えてして数に、其の人の色々な連想がついて廻って居るのにそれを自覚しないように見受けられます、フィヒテ参照。)

《数の観念が心のどの層に住しているかと云ふことが、思慮を絶して大切です。虚空の次元《度》のかず。》

### 3 母のお国 (支那) に再び順序 (時間的, 空間的) を教へて頂くこと (師恩)

(修身, 齋家, …, 礼樂射御書数, 伝説に於ける順序《伏羲, 神農, 黄帝のあと二つが, 時間的順序をふりかへて, 帝舜 (舜帝と云はぬに注意, だから孝の徳) の上に娥皇, 女英のお二方として第七門式に, 映っているように, 私には, 今 (時によるでせう, それが本当です, 用), 見えます。ちなみに, 之は伝説 (第七門) と云ふよりは, むしろ文章又は文学 (第六門) でありませう。尚, 三色のうつりは, 歴史は第八門. …)

### 4 新しく土地を移させて頂くこと (母恩)

(私たちの文化と肉体 (素材其の一), 視野 (時, 空) の狭小, 日の照す国 (と月照す国))

### 5 眼前の好研究材料 (其の一, 大)

(私たち (日本のくに) は, 国際的に平和をみだして大変な御迷惑をかけてしまふよりずっと前に, 平和は先ず国内から地を拂ったのでありました。病気がこの順序に進行しましたから, どうしても踏み止まることが出来なかったのです。其の有様は?, とすれば繰り返さないためには?, 進んで世界の平和に速かに貢献するためには? (今は一刻をあらそひますから), 何よりも戦犯の芽生えは?)

6 (其の二, 小) (特に急ぎます。あつと云ふ間に逃げ去って, 「消えて行く字がよめな

いで居る」になりますから。)

(投票に結果する (結果を早急に小さく問ふ佛道は絶対にありません。どんなに急ぐときでも, 先づ播種して白根をのばさなければなりません。), それまでの「歩みかた」が一目で分るような「波形」を見とめ聞きとめたい。)

(一例, 私は, 第一日の前日, 道頓川のはしをよぎったのですが, 「蟻の甘きにつくが如し」, 票数のふえ方を彌次っている人々の顔, 声, 姿, 等から直覚的に判断)。

7 机上の学説とその早急な実施との中間に一度実験室を通す操作を置くことの要 (御迷惑を大きくかけることを避ける, 研究の自由の要)。

### 8 先ず身 (個人) について。

(かりに帝舜 (孝徳 — 父母に孝, 父母は上述) の位置に立って (第十門) 申しますと: 娥皇 (黄衣の人) 出でよ (女英 (赤衣の人) 之は赤十字軍))

(こう云って居る間にも, 光と闇との死の戦ひは, 各人の心の中で, 大悲しばしもやすむ時なきが如く, 寸刻の休む間もなく戦ひつづけられつつあるのであります。武曲と文曲 (唐の太宗, 宗の仁宗), 黄帝でなければ, まだ炎帝は外に出るのははやい。

以上すべて後の私たちの研究の準備。

[自由, 正直, 解放, 淡白 (話せばすぐ分る), 憧憬, スピーディー (ジュネーブは其の反対, 機能的な病気を直すには射が大切, これは生きていますから), 一言にして云へば新鮮潑刺, 日を喜ぶ国, 即ち同質の国柄, よしさらば母の心の骨, 孝の徳をひろって背の方向に投げよう。]

それから、私の小便ですが、朝はまだ、大分うすくなっていますが色がついていました。それから今ですが、もう白くなっています。量も（回数のように）二度ともまだ非常に少いようです。食欲は、普通ですが、昨日も今日も朝はいただきませんでした。睡眠は普通です。

それで上の目次ですが、皆さまのお考へは如何でございますか。（始めを一寸よみ返していますと後の二時、自問自答、二元）。ではともかく始めてみませう。但し、時間的にどの場所を撰ぶかと云ひますと早くて明日（28日第四日）がよいようです。（感じ、研究者の感じの上に自身を表現してみせる心（心、意、識のそれ）、このさいは「けだるさ」の感じ）。

けだるさやかき起されし春の雨（芭蕉）。

よしそれでは今日のあと半日は

春の海ひねもすのたりのたり哉（蕪村）。

#### 第四日（28）

み吉野<sup>ぬ</sup>やたかつぬ山<sup>こ</sup>の木ぬれには（声、発句）

／＼  
ここだもすたく鳥の声かも（赤人）  
鳥も囀る合点なるべし（去来）

Never put off until tomorrow what you can do today! 「死ぬものは真の自己ではない」のに違ひありませんが、この肉体を失ってしまひますと、それは手なれたバイオリンが壊れて了ったようなものでありまして、もう一度買って引き慣れるまでには、日で測ると大分時間がかゝるのであります《ここを広く解して下さい》。正行の射に習わねばなりません。

勅なればいとも畏し鶯の

宿はと問はば如何に答へん（小式部）

然し如何に急いでも、無闇にポキンと折るような全く審美眼に合はない曲げ方をしたり、移し植えたばかりの木を手柄にしたさにゆさぶるようなことをしたりして、白根や毛細根を切ってしまうてはならないのであります。それに、たとへば議員諸子（第三人称）、諸子は諸子が議決すれば、たとへば大銀河系がその通りに運行するともお思ひになるのでせうか。お一方でないから、話しにくくて、いつまでもこんな風ですと、よけいにしまつにおへません。

自由の野辺に花さきて

希望の子等は群れつどふ（三高寮歌）

梅をかざしてここにつどへり（奈良の御世の人）

（「上々の菩提は信じて疑ひなし」）

此の前後の波形は大切な上にもわけても大切であります。これが「微妙音の一としじま」でありまして、「まさに逃れ去らんとし流石にのこり惜しげにしばしたゆたふその静の一刹那」をとらへるのであります。之が潜在意識と意識とが運河を通じてわずかに心

をかよわせ相ふパナマ地峡であります (野口英世に心を学ぶこと). (「佛<sup>ほとけ</sup>は常にいませども現ならぬぞあわれなる」, 難思光, 不可思議光). 「数学的発見」のなるもならぬも「この刹那 (初覚)」にかかって居るのです. 若し逃がせば, 原則として, 永劫<sup>ようけつ</sup>再びは逢へません. その代りもうまくとらへれば, 水蒸気が最初の雨滴に凝集するようなものでありまして, あとはかんたんに (松風のあとは) しぐれとなるのであります. または結晶の核が出来て, あとは放置すれば生長するようなものであります.

私たちはこの千歳一遇の好機に [大にしては世界の状勢が正にそれでありまして!], この秘曲を充分よくみとめきゝとめて金石に録しておきませう.

一寸その前に, Mémoire VIII の No. 3 で, (名は常にさまざまあります) と申し上げましたでせう. 上述のようですから,

### 「語感」

には, 数学と雖も「いゆきはばかって」ふれないのでありますよ. (影を捕へる指).

それでこのあたりに私の肉体や心の「歩み」を丁寧にお話し申し上げます.

おそいおひるを頂いて, そのあと私は梅をさぐらうと思ひ立ちました. それで, まづタバコとあめと蜜柑 (之は小便の「量」が気になりましたから) とを買いました. 其のタバコ屋の筋向ひに, この辺ではたった一本の真紅の紅梅があります (少いのは, この色は実からでは生えないからだと云ふことです). 毎春こわごわ一輪か二輪そっと頂いて押し花にする慣しなのですが, いつも他の梅よりもずっとおそいのですが, 今年は梅には春が速くて, 一輪二輪はふくらみ初めて呉れていました.

嬉しくなって, それから年々行きつけていた白梅をたずねました. 之は大きな木です. この今の二た間の住家に移る前, 私たちの借りてすんで居た家の道路 (がすぐ前にあるのですが, それ) から云へば裏, 方向から云へば西少し南, 高さから云へば少し下った所にありまして, [こんな風にお話ししていますのは時空の框 (マチスの窓) にじっくり, 私たちの気持をはめようとしているからでありまして, 西とか下とかの方には意味は全然ないのでございますよ! (良書の翻き方, 波形の方を読後感に残し, それを心の種板にやきつけるのです. 人ならば表情の動き. 位置は多分後頭部, 之が Mémoire VII の操作 [Considérer] (又はその逆), 論文を original でよむことの要, 悪質の漫画は悪徳そのものに近い.) 佛道は常にそうでございますよ. (たとへば, デスマスクを取るでせう. そうしますと顔の「波形」が永くのこる. この云はば副のない面のようなものこそ一切の光彩のもと, あとは単なる縁 (刺激) なのであります.) (梅は) 西に向った切岸に, 上部に近く生えていて, [此の西と云ふ言葉には今度は意味があります. 一つは今は午後であること, 今一つは午後と午前とは感じがすっかり違ふこと — 量ではありません, 「傾斜」であります.], ずっと下に小川がせせらいでいて, その向い岸はまた切り立った崖, 眼はそれをのぼってしばらく, 田の面にたゆたひ, 再び丘に隆起しています. 崖の高さはこちらよりひくいから, 田の面と云っても今は畑ですが, それが少しは見えます. 川端には主として向ひ側にですが, 無理に土地を求めて狭い竹藪があって, 所々にはシュロもまじっています. [之もマチスの框, 反対の画が「曇天の頭痛」, 私は打出時代に三脚と画板とを持ってよく写生に出掛けました. 此のとき下手に絵を書く癖を念入りに植えつけましたから絵は今でもごく下手ですがこれが後年の「知, 情の considérer」には大いに役に立って居るようでありまして, これこそ「洞察力の母」なのです. 教育者 (第三人称) は視野を空間的, 時間的に共に最広義の意味に於て, 大

きく開かなければいけません (文みゃく). 尚, 描写には第十門が大切です (原田禅師の名言「尋ね思ひ」参照). 西洋の「個人主義」はこのごく大切なものを少し固定しすぎていますし, 日本のは之はまた思ひ切り固定したりしません. だからすぐ「礼を欠いたり, 御迷惑をかけた」するのであります. (自律の要, 本当は理性はそのために與へられたもの, 問題がそれ以上大きくなりますと, 純粹直観でなければ間に合いません.)]

この白梅は, これもこの辺でも (こんなに早いのは) これ一本しかないのですが, どんな寒い歳でも

### 「紀元節」

にはきっと雪を破って笑ひ初めて見せてくれます. 今年はもうすっかり開き切ってむせるような匂ひでした.

私は梅に真向って草の緑といってもやがてのそれですが, それをしきます.

15 ある蜜柑の中 14 までを食べ 1 つを左の袂にのこします (と云ってもそれが分ったのは私が家に帰ってからでしたが). やがて (彼は) 心をそぞろあるきします:

すみしよの春なつかしきふるさとの梅のさかりを誰かみるらん,  
逢坂のせきのふるみち春ゆけば杉生かすみて鶯ぞ鳴く

(明治天皇)

「御園に遊ぶたのしみは無為の都の春ながく」[如来光明礼拝儀, 聖きみくに (情 — はなのみくにの方は智). それから「素材其の一」の「訂正」で「御集」を「善」と申し上げて「美」と申し上げませんでしたのは, あれは無量光如来さまの美ではなく, 無礙光如来さまの美でもなく, 無礙光如来さまの, 主として情のみ園の美だからであります. (最近の大失敗を繰り返さないための最良最強のエアブレーキ).]

やがて梅の薫りはすっかりをつつんでしまって, 萬景動かず, 日はいと清らかにハッキリ, ハッキリと静かにまたたき, 小流れはサラ, サラとあるかなきかにせせらいで, 僅かに静をリズムカルにそよがせてかわらないために, 反って一層の静をよんでいます. 今はもう時も其の正負の歩みを止めてしまっているでせう.

一口に云へば, ジーンとすみきりながらそれでいてふうわりとつまれた, 一寸人の世にはない色どりの静かな悦びの世界なのです.

之が心, 意, 識の心でもずっと上の方 (しかも上ってまた下ったそれ, 秋さり参照), 七覚支 (之も輪の大きさや種類をかへて無限に重ねるのです), その型で云へば輕安覚支の終りの所です. ふるさと近くのごく良質の種を賣っている種物屋さんだとお考へになればよろしい. 云はば,

この時中夜寂然として声なし (遺教経)

眉白の老僧時に簪を止め (忘名)

この古今三世のしじまのさ中に於てです. 川蝉の影がサットかすめましたのは, 口をついて:

川蝉や三尺わきに己が影 (芭蕉)

(川蝉, 之は蝶ならばルリタテハ, 蝶では, 日本でならば, 外に大むらさき, 褸むらさき等とり分け美しいと思ひます. 惜しいことに, 残酷ささへともなわなければ,

## ムザンやな甲の下のキリギリス (芭蕉),

蝶類の採集をおすすめしたいのですが.)

何のことだか少しも分りませんが (消えて行く字がよめないでいる, 事実あったこと), すぐ小便をしてみました所, またマッ黄になってしまっていて, それもほとんど出ません. (非常に凝神しているほりでは, その強さ並びに季節を小便によって測るのがよく分るようです. 頂上に於ては決して出ません. 数分後には二階から目薬程出始めます. もうこうなれば安心してよいのですが, それまでの時計で測った数分間は心情の絶対安静が必要でありまして, 分けてに三毒などを交へようものなら, 其の害の波及する所, 実に恐るべきものがあります. (すべて幾度も身を以て実験ずみ, 意識してか否かは無関係).

それで私は経験で, 既にその捕え得たことを充分よく知っていますから, 少しも疑はないで, ごく静かに然し直ちに [この二つの心得を忘れずと折角の胎児が日の目を見ないで死んでしまひます. 歩き方二種の中,

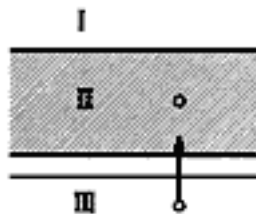
### 背の子をねかせつける歩き方

がこれです (如浄, 道元二禅師に参照). ([真如門中不生一法], [空中独り吟ふ白雲吟 (漱石)].) M émoires I, IV, V 分けても VII が正しくその型のものでありまして, 従って内容的には空なのであって, またそうしなければ次の「芽生え」が生れないのです. それでも M émoires (I - VII) のかずは, 俗流的 (芥川参照) に数へますと 8 つになるかも知れませんが, 本当は (I, III, VI (の Partie principe 或は Note), VII) の 4 つしかないのです. 子をはらまないで, 子が産めるでせうか (無茶ですネー). 皆さまは, 数人のかたは別ですが, まだお小さくてお産みになったことがありませんから, 充分にはお分りになりませんようですね. ではこの辺の所をもう少し丁寧に御説明いたしませう.

(ここで一度おひるねにしませう. はなしに勿体をつけますために. 時計はよい按ばいに止ってしまっています. しかし日で高さを測りますと, かれこれ後の三時でせうか.)

やはりつづけませう. 流れは鳴り響いている間にでなければ写生出来ませんから (芥川参照). (仕方がありませんから今日はお昼も抜きます小便はやゝ正常に復していました.)

さて, 背の子の位置と来所でしたね. 心は大体図のようになっているのです.



I : 識域 (意識, 理性, 外界, 歴史等)

II : 識域下 (広義の哲学, 三世の種子, … ;  
一口に云へば心情)

III : 狭義の宗教 (不壊の愛)

それで生れ方ですが, III (愛) から II の (分らぬ感じがある) 辺に生れてしまって, と見るやもうそれを背におんぶしているのです.

そうでせう. 感じだけがかすめ飛んだのではなく, 既に句の形をそなへて飛んだのですものね.

ここで「訂正」の「発見既にかくの如し」と「素材其の一」の No. 1 の「ような気がして来ればそれでよいのです, 子規」とを今少し丁寧に御説明しておきませう.



先づ后者の「子規」ですが、これは正岡子規の「草花を写生していると造化の秘密が分つて来るような気がする」と云ふ波形の模型が如何にもよく出来ていますから、作者の名をしるしたのですが、子規には「自覚」がなかったにきまっています。証拠は芭蕉が分らなかったことです。私は、

「ような気がして来ればそれでよいのです」

と申し上げまして、それを説明したでせう。之は何かと云へば、これこそ「佛眼」です。佛道では

「自覚」

を大切に、原則として、自覚した時以後存在するとしていますでせう。これは、一口に云へば、「自覚」は「眼」だからです。

これで、大体前者即ち「発見《既に》かくの如し」がお分りになりましたでせう。佛道的に時を数へますと、Mémoire I (1) は Mémoire III (2) 以後に於てしか存在しないのです。手探りに探りあてたのは、よし後にそれが眼がひらけてくるよすがにはなっても、見たものではありません。]

さて、私は直ぐに静かに家に帰りました。

炬燵にうつぶせにねて、またコーヒーを入れて「煙草とあめは一々申しません。タバコの味はこの「境」では「期待の味」です。瞬間の後位何が起るか分からないものではありません(右経 27)。「スパイ用心」のレットルなんかで口火をつけられない所以です。「疑と私」とは本当のお浄土の根本的破壊であります。(映畫ならば私の方は余り影響しません。一寸考へてごらん下さい。だって、影ならばいくらむさぼってもへりませんものね。)

そうして、久かた振りに、光のどけき「秋の心のふるさと」(光明主義は原則として「春の心のふるさと」)華嚴經(私は前半しか持って居ないのですが)、それをおもむろにひもときほどこきました：

世界の目下の大危機の由来する所を一言に評し去りますと(之はまた雄々しい鳴弦ですネー)、

「理性が(A)動脈硬化になり、かつ(B)粘りついて凝固してしまっていること。之が病症であります」

それで、御自慢の理性がまっ先にさっぱり働かないのでありまして、放っておけば、(たとへば)脳溢血による即死(たち)が口をあいて待っているのみでせう(いよいよいで面白次は何を云ひ出すかしら、一寸一服)。

しかもこの末期的理性がしいたげて居るものは、大切な「望遠鏡、純粹直観」なのです。信じない方は試みに数学史を心にひもといてごらん下さい(オヤオヤ、「東風のまた西になり北になり、「本来無東西」)。ニュートン以後ニュートンありますか(それは、その高さで見るとおつもりならば、全くそうですね、つまりニュートンは偉いですね)。(少しだまっていられっしやい、えーと何でしたかそうそう)硬化、(語勢のため二つ(A,B)をかりにこの方で代表させて申し上げますが)、それは既にこの頃「萌し」て居たと見る外ありません。それが、H. Poincaré まで来れば大分「目に見え始め」て居ます。御説明いたしませう(Laissez parler, 「任持自性軌生物解」)。

観衆は「インスピレーション」の華やかさをやんやとほめそやしますが、これは、「緑蔭」の中ならば、{シュロの葉ごしのようなものでありまして(声)}、私にも、経験があります

が、共に Impulse に逢って起るのが其の特徴なのです《直接行動厳禁!!》。之は初期の動脈硬化の症状です。

ではどんなのがよいのかと申しますと：

ねむの木の葉越しもいとへ星のかげ (芭蕉)  
朧夜の月はさすとも見えなくに  
窓にうつれるはなの影かな (明治天皇)

理性が心意共に柔軟<sup>にゅうなん</sup>(光明礼拝儀)ならばきつこうなるのです。いわば上等のウイスキー、玉露でもよろしいが、その味であって、ふうわりと蒸発してしまつて、のどまでに消えるのです(初覚)(「川蝉」に参照)。(全くそうです、ただ日本にはこの現象が数学にならないのは、不幸か幸か始めから手のみあつて頭がなかったからですよ。)私たちは現状を見つめて(「何をくよくよ」して)居るのではなく、真直に理想を見守つて申し上げているのですよ。

私は札幌での第一報のあとで、「此の味」を探し求めて居たらしいのですが、仲々出せなかったのです。まして正体の分らうわけがありません。(末期の一念ですね)。

ではこの理性の病気を直すにはどうすればよいかと申しますと、病気は二つ雜っていますから、薬は二ついるのです：

「愛と捨」。

辨榮上人のお筆になつた十二光佛中の無量光佛さまをごらんになって、

み顔とみ手

とを特によく拝んでごらんなさい。(合掌)。

愛は疑を永く断ち、捨は私(ことわりにあわぬ行きがかり)を順次に去るのです。

樂器にたとへますと、「華嚴經はピアノ」,「光明礼拝儀はバイオリン」です。

後者は「泣くが如く訴ふるが如く」哀調切々とどかに胸につたわります(境の本体)。(ドストエフスキー白痴参照)。但し、時としては「アコーディオン」,このときは何としても「あわれ」です。

では華嚴經はどんな風か、これはその中に頭の琴線がひとりでに鳴り出すのです。それで、これは秋の夜を月面白くかなで明かす、蟲のオーケストラにごくよく似ています。本当はその反対でありまして、「決意」(第三信)で申し上げました法藏寺の秋の一夜には、初めに、私大ミオヤさまの蟲の、お手ずからお奏で下さる華嚴の原經を心ゆくまで聞法させて頂きました(第八門)(三拝)。

私、Mémoire II の下書きの頃伊豆伊東(初度)で、寺田寅彦先生に唆かされまして、先生御自身はもうなくなって居られましたが、お弟子の中谷宇吉郎さんと、だしぬけに連句がしてみたくなりまして、それで俳句の方も大急ぎで稽古をしたのですが(文字通りに古へをならひ、「古みをとつた」のです)、そのとき一番困つたのは西洋音樂の方でありまして、「仇汐」が何だか「ロンド」が何だか少しも分りませんから、何しろ中谷さんの所には、温泉やお魚はありましたが、西洋音樂について云へば、蓄音器と静子令夫人御持参のベートーベンの「スプリングソナタ」一曲と、この「ひとつがひ」しかありませんでしたから、そればかりを毎日毎日繰り返して繰り返して聞きました。それで音樂の中では今でも之が一番好きです(尤も他のものは今でも余りよく知りませんが)。

あれは、バイオリンとピアノとの双蝶の舞ひでせう。華嚴経と光明主義とをそんな風によりつよられつ奏でられないでせうか。狭義の文化(娥皇)と狭義の宗教(女英)とを心の一つ家で仲よく暮させる第一歩(即模型)としまして。

ちなみに伊東ですが、今一度参りました。Mémoire III 時代にです。色々原色的な現象が記憶に残っていますが、芭蕉の分類法(A,B)に従って、其の中安定性のあるものを二つお話ししますと、下宿の窓の真向きのたかむらにたかがきたこと、真紅の紅梅に鶯がとくべつよい声で鳴いていたこと。

もとへもどりまして、華嚴経をきいたあとでは、たとへば木魚の音は、耳から廻ってはいったりなどしないで、直かにピーン、ピーンと頭へひびくのですよ。

さて、華嚴経をひもといっています中に、こんな風に「境」に入ったものと見えまして、胸がつまって声にも出なかった「川蝉」の「悲噴の涙(小学讀本)」を以てする訴へが段々聞え出して参りました。それはこう云ふのであります：

〔紀元節〕

と云ふのは本体は

〔時の奏でる調べ(第九門)〕

ですのに、それに、それに、「建国祭」等とされてしまって、重くって、重くって、甲にふせられたようで、私たちはもう

〔御集の梅のお園〕

に遊ぶことも出来ません。とかすかに絶え絶えにこう訴へるのです。ことわりであります。

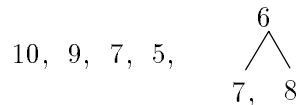
川蝉はやっとこれだけ云って、また胸がむすぼれてすゝりないてしまいましたから、あとは私が代りまして御説明申し上げます。

先づ、周の盛代に、今一度教育について学びませう：

礼, 樂, 射, 御, 書, 数.

これは実によく波形を捕へておられます(三拝).

之を華嚴の十玄門で書き直しますと、



こうです。無礙光如来さまのみ園の音楽ならば、つまり用の所の波型ならば、私には之以外の波は起ったことがありません。(但し、後述の御を除く)。ここに云ふ書は真書、(6の8)はたとへば(ノアの箱舟)でありまして、この終りの二つ(真書、数)に入っている諸要素の中で取り分け大切なのは：

〔よく慥めること〕, 〔簡潔化すること〕

の二つであります。この  $6 < \frac{8}{7}$  が仕上げであります。この結び方を其の形から、

〔燕結び〕 又は 〔燕尾〕

と名づけませう。そのとき、比較して具体性の多い方が (6 - 8) であります。(一般に定理はこの (6 - 8) であります。) Mémoire VII は勿論, Mémoires I, II, III は皆この燕尾形であります。  $6 < \frac{8}{7}$  は (6 - 8) が礼, (6 - 7) が樂。かように第七門式にいくらかでも繰り返されるものであります。又礼を人に対するもののみと解してはいけません。私たちの文化が、肉体に於て、ギリシャに発しているのは、この言葉を使って申しますと、ギリシャの人達は「知性に対して礼を欠かなかったから」であります。

私たちが今歩いて来た道について申しますと、初めの頃が礼 (重ねて申しますが、ここではほんとうに人としての礼ですが、(初めにもどって書き加へたもの、主として《 … 》, は別です), この言葉を窮屈にそうばかりに解しましたことが、漢以後の弊を生んだとさへ言へるのでありまして、日本はそれをよろこんで取り入れて、封建制の一方のかためとしたように見受けられます。), それが Problème p の目次までつづいて、(この目次自身は結び  $6 < \frac{8}{7}$ ), そのあとが自ら樂に出て、探梅行となったのであります。

その樂の部をよく見ませう：はじめは春の調べ、それが段々秋の調べにうつります。

此の二つのしらが交響する恍惚のひとつときがあつて、そこに於てです、「川蝉」のかけがかすめ飛びましたのは。これが射。

如意輪観音 (俯仰天地にさへ誇りうる不動の決意と不惜身命の情熱とを持った人)、この観音さまの射法は、見た目には、刹那を入れずに矢が銀線を引いて飛ぶよと見えるかもしれませんが、本当は、そのときはもうすべてを托した矢が既にゆん弦を離れてしまっているのです。 (見えぬ的を十一分にためてうつ)。 (火花の飛び方、寺田寅彦、中谷宇吉郎に参照)。

第七門でなければ出来ない所以です。又、決意と情熱とを欠いては出来ません。

この大切な射が、樂の中央部分で芽生えるのであります。

それからあと、二重結び (燕の尾) に結晶するまでがすべて御です。第五門が一番多いようですから (コサックの騎法) そうしましたが、これは実にさまざまありまして、すべてにあてはめようと思へば、第一門 (直趣無上菩提、お畫像即如来さま、無相即相) でないと出来ません。我々の欲しいのは「常に最上のもの」ですから、書きかへませう：

用の波形の相 : 10, 9, 7, 1,  $6 < \frac{8}{7}$

(重ねて三拝)。

所で、「川蝉」の訴へはもっともですよ。だって考へてごらんなさい、「紀元節」とすれば正しく樂であつて、しかも時 (+, 0, -, ポツリポツリとある) のそれであつて、一月の礼につづく二月の樂ですから、それに一寸あれを聞いてごらんなさい：

雲にそびゆる高千穂の …

海な原なせるはにやすの …

きゝ入れば、私たちの心は時を逍遙して感懐やみませぬ。春秋のしらべも丁度よくまじり合っています。かるく澄んで土の要素が全くとれてしまっています。お空に内外のへだてがありませうか。それで

雪裡の梅花一枝 (道元禅師の単伝)

はここで開くのです。これこそ Problème p 其のものではありませんか。お分りになりましたでせうね。

これに対する「建国祭」の語感から、これをよろこぶ心を推して、今一度充分よく御注意しておきたいと思ひます。これは樂のキリギリスを伏せる甲、漢の礼即ち封建の心、土のにぎり、私、であります。

自治の国の投票者は先づ其の責任を自覚しなければなりません。之が礼の始まりであります。撰ばれた人は移された重責を自覚しなければなりません。之が礼の始まりであります。

学生諸子には、先づ次の寮歌（三高）をきいて頂きたいと思ひます：

神樂が岡の初しぐれ　老樹の梢つたふとき  
けい燈かかげ口ずさむ　先哲至理の教へにも、

之が学問に於ける礼の始まりであります。水の掬として、高きより低きにしか流れません（及び講義のきゝ方）。すべて礼は心のそれが大事なのであります。姿には色々にあらわれます。たとへば、Mémoire I の芽生えの Potential energy, あのよみ方が真の礼であります（道元禅師、佛祖の真面目 — 畫餅）。《調べてここにいたれば、またしても後の正四時》

大ミオヤさまは独尊、統撰、帰趣のオヤさまでありますから、私たちは其の子である自覚を持たなければなりません。

#### 「独尊の自覚」

は、姿に現はせば、「他を敬ふこと」に外ならないのであります。

「語感」の恐るべき所以を申しましたが、ここに幸ひその間の消息を語る具体的な一例がございますから、それについて御説明しませう：

私の中学五年の時の文稿帖が偶然一冊だけ残っています。

#### 「菊を愛する説」 「克己論」 「衛生の必要を論ず」

と三つでして、第三だけが第三学期に入っています。そうしますと「菊」は多分菊のころでせうから、季節もよく分りますね。（之が実に大事です。よく書いておられますね。順序と云ひ（三拜）。之は（下って）当時では非常にぬきん出て居られた漢文の先生がお出しになったのでして、直されたのも、句のよこへ丸丸や点点をつけて、おほめ分けになったのも同じ方です。（多分そうです。そうだと御一緒に見て行きます。）恩師を引き合ひに出すことになりませんが、この際だからきつと反ってお喜び下さいますでせう。

上の中第三の「衛生」は漢文流でして、皆さまには一寸字義が分りにくいかも知れませんが、始めに御説明しておきます：之は平素の心得を指したものでして「養生」の「進」に対する「守」を意味するのです。つまり不断に生を衛ふことです。

ハッキリ第三者として評します：

「菊」— 実によく書いて居ます。よく響きよく匂ひよく通ります。所が、直し方は悉く直した方の人の心の眼の低さを語って居るに過ぎません。唯一ヶ所「唯か」を「誰か」と直してありますが、之は筆者の書き違ひであること明らかですが、直し方は「かを消」した方がよろしい。関接の自由も余りきいていないのであります。丸丸の打ち方に到っては、悲しくも此の頃既に、或ひはずっとそうだったのかも知れませんが、「鷓鴣」そのものであります。[附記：「嗚呼」を「嗚呼」と直してあります。但しこの言葉は二度出て来るので

すが、二度目はあっています。これも注目すべき現象です。(ここに到って思う所速に云ひ出でてまた迷ふ念なし、芭蕉。)しばらく評者の位置を離れますが、私小学六年のとき、この頃はもう郷里へ帰っていたのですが(学校は柱本)、その二学期に竹馬から飛んで篠竹の切りかぶを右のかかとに打ち込んで一と月半ほど(学校を)休みました。その頃です、つえを助けに、片足でとんで少し動けるようになると、毎日毎日すぐ上の蜜柑畑へ行って、黄菊でしたが、その蒼の日に日にふくらんで行くのがうれしくて、小春の小半日をその横で座って暮しましたのは、それがここへ出たのでせうね。こんな心の「名文」は、今の私にはもう書けません。同じ響きは二度とは出せないのです。

「克己論」—「\*<sup>1</sup>然」を「蹶然」,「\*<sup>2</sup>き」を「易き」,「全ふ」を「全う」,「\*<sup>3</sup>」を「賜」。この直し方は皆よろしい。これも相当は書けていますが、筆者はこんなときにでも文の勢を殺すのがつらいと見えます。ずい所に其の跡があります。上述の字の間違ひ方が既にすべてそうであります。見よ「語感」は耳ばかりできくものではありません!その数の多いことが次にそれを語りませう。他の直し方は悉く間違ひです。ここには丸丸はなく点点しかありません。これはよく見抜いてあります。其の打ち方もよろしい。

「衛生の必要を論ず」—これは共に(書き方、直し方)無難かと思ひますが、もう一つ底に力がこもって居りません。従って「菊」のときのようにいちじるしくはありませんが、やはり原文の方がよろしい。これにも点々しかないのでよく見てあります。

総評点は三者同一ですが、之は全く分りません。けだし評者は「感得は出来る」が「自覚」はなかつたのでせう。この頃悲しくも!既にそうだったのでせう。(だから、行の有無を見破れないのです。)

御覧なさい。これは大正の御世もまだ浅いころのことですが、私たち日本のくにの後の大病は、はやここにその「萌し」を見せています。病の種類さへはっきり分るではありませんか。


それに、むしろそれよりも、文の響きや匂ひは心の、従つてくにの骨格なのでございますよ。皆さまはそうは御考へになりませんか。 (往時の文、今は広義の文化)。

それで結びの一半はもうすんだとも云へますし、それよりも素ともと「波型」を表現するためのよすがにすぎないのでから、Problème p についてまとめて、結びとしませう。

### Problème p



ドドーッと来て、ザーッと碎けて、スーッと引きさ(つて了ふ)。この「さ」の辺が  $\alpha$ 。ここが数学的発見の真に芽生えるところ。「まさに永く逃れ去らうとして、流石に懐しく残り惜しくて、しばしたゆとふている

刹那の静」(微妙音)。(樂中の無意識裏の射)。白  がドドーッ、之が体。かけ



がザザーッ、之が相。(そのどこかに  $\alpha$  のかけ、それが大誓願力)。あとが用(三

昧定力)。

<sup>1</sup>「蹶」の字がさんずい偏になっている。  
<sup>2</sup>「易」の字の「日」の下に横棒が入っている。  
<sup>3</sup>「賜」の字の傍の「日」の下に横棒が入っている。

用の波形(相)は(礼, 樂, 射, 御; 書, 数). 華嚴の十玄門で云へば  $(10, 9, 7, 1, 6 < \frac{8}{7})$ .  
詳しくは本文参照, 今一つは Mémoire VII 参照. (合掌).

(1949. 1. [25, 26,] 27, 28)

結局何が発見されたのですか. Problème p そのもの. 詳しく申し上げますと, [Problème p] の用の三世不懐の音面(相)と「微妙音」のとわになりやまぬ響きと. (捻華三礼). (29日加筆).

(無声の問ひ). それでハッキリ「数学」の金石の上に彫りこまれたのかとお問ひになるのでせう. それは, Problème F (affirmatif) の芽生えは, このふたくさのみ宝, 心の望遠鏡と心の検微鏡とによつてはじめて芽生え得たものであることが《またしても後の正一時》, これを書き上げますと同時に, 今や瞭々としたものになりましたからそうなのでございます.

(無声の問ひ) 数学に於ける「理性」の位置についてでせう. 数学の本体は「愛に根ざす純粹直観」でございますが, 「理性」は「数学の母」としてこれに肉体をあたへるのであります. 又, これも母のすることですが, 幼い間はその個々の行動に「自律」(舵取り)をもあたへるのであります.

もう御質問はありませんようですね. では「衣装して」(礼, 心構え) 今一度奏で(樂)てみませう. — よいようでございます(射).

(30日調律, 於紀州紀見村).